

# ナル子・ダークサイド

芋一郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ナルコは木の葉の大人たちから虐待を受けていた。

これはそんなナルコがダークサイドに落ちるのか、そうならないのか。

そんな物語。

※木の葉アンチはしません

5話  
4話  
3話  
2話  
1話

--	--	--	--	--

60 42 28 13 1

目次



## 1話

うずまきナルコは木の葉の里の嫌われ者である。

道を歩けば謂れのない誹謗中傷を受け、時には直接的な暴力を振るわれる時さえある。

そしてそれらの嫌がらせの中に、ナルコの最も印象深かったエピソードがあった。

あの日は朝から重い雲が漂っていた。

ナルコは当時四歳。買い出しのため、自宅であるアパートの一室をしばらく留守にしていたのだが、イー玄関を開けてすぐだった。

可愛がっていた犬の死骸が転がっていたのだ。

名は付けていなかった。付けるつもりもなかったし、そもそも飼ってさえいなかった。

時折近所の公園へ赴いて、イー件の犬はそこを根城としていた。イー撫でたり、抱きついたりしていただけだった。そしてその対価として僅かな餌を与えていた。

要はギブアンドテイクの関係だったのだ。この犬は友達でも何でもない。自分とは無関係で、だからこそ、こんな風に殺されていいはずがなかった。

明くる日、ナルコは件の犬を襲ったであろう里の男の元を尋ねていた。

この頃、特にこの男からうける暴力行為が酷かったので、目星はついていたので。

『別にあの子は、わたしのことも思つてなかつた。エサをくれる人間くらいにしか

……なんで殺した!』

『うるせえ』

男はナルコの腹を蹴りつけながら言った。

『お前が少しでも幸せそうにしていると、ムカつくんだよ』

ナルコは腹を押さえ、痛みに呻きながら思ったものだった。

——それなら自分は今も、誰とも関わり合いにならないでおこう。

うたた寝をしていた。先ほどまで、ナルコは懐かしい夢の中にあつた。悪夢の類ではあつたが、それでも春のまどろみは気持ち良かった。

本日は忍者学校（アカデミー）の入学式。

ナルコとその他の新アカデミー生は午前中の内につつがなく式を終え、現在は一年生の教室で担任のうみのイルカより、注意事項、連絡事項等を聞かされていた。今日の日程はこれで全て終了して、12時には解散の予定である。

「あつ、おいアレ」

「ナルコじゃないか……」

「うちの子と一緒の教室なの……?」

「クラス変えてもらえないかしら」

教室の後ろにずらりと並ぶ新入生の保護者たちから声を潜めた騒めき。ナルコはそれを、まだウトウトとしながら聞いていた。

「うずまきナルコ!」

「!」

驚いてパチリと両目を見開くと、目の前にいたのはうみのイルカだった。

……もしかして、自分をアカデミーから追い出すつもりかもしれない。

ナルコがそう身構えていると、頭頂部に硬い感触を感じた。見ると、うみのイルカの拳が自身の頭の上に乗っている。

痛くなかったが、どうやら拳骨のつもりらしかった。

「さっそく居眠りとはいい度胸だな。学校は自分の部屋とは違う! 勝手に話したり、寝たりしてはダメだ! いいな!」

「……………」

「返事!」

「うっさいバカ」

「……!!　ナルコ！　お前はこのあと職員室へ来い！」

初日からの呼び出しをくらったナルコに周囲から失笑が漏れる。

出どころは保護者の一団からだったが、やがてそれがクラス全体に波及した（といっても、子供たちからのそれは悪意のないものが殆どだった）

「……先生は何もナルコだけに言っているわけじゃないぞ。みんなも、これからはアカデミー生としての自覚を持って、しっかりと勉強に励んで貰うことになる。それと、保護者の皆さん」

イルカが教室の後ろへと目をやる。

「先ほどから私語が目立ちます。慎んでいただきたい」

教室での説教は以上となった。

新入生たちは解散と同時に保護者の元へと向かい、今後の抱負やら、昼食について話しながらそろそろと帰宅を始める。

それを何となしに眺めていると、逃さないようにする為か、ナルコの肩にイルカの手が置かれた。

「お前はこっちだ」

普段なら警戒して逃げる算段を立てるかとおつくにそうしていたところだが、親子の波に混じって一人家路を急ぐのもまた惨めに感じ、ナルコは素直に従った。

イルカは教室を出て、玄関口へと向かう親子たちとは逆方向に歩き出した。ナルコもその後ろを付いていく。

二人はまず、一階を玄関を抜かしてぐるりと一周した。

続けて階段を登り、二階もまた一周。ナルコはその途中で職員室らしき部屋を確認したが、イルカはナルコに待つように言つて、鞆だけ持つて来てまた歩き出した。

二人は三階も同じように回つて、屋上へ出た。

「よつと」

ナルコが不審に思う中、イルカは屋上の奥まった所に腰を下ろすと、鞆から茶色の巾着袋を取り出した。そして所在無さげに立ち尽くすナルコに笑いかけると、自身の隣を指差して手招きをしたのだった。

巾着の中はおにぎりだった。

「食うだろ？」

全部で三個あつたそれを、イルカは二つナルコへと渡した。

一つ一つが大ぶりで、不恰好で、作った人間の「腹が膨れれば良い」といった思いが透けて見えるそれは、ナルコが初めて口にした他人の手料理だった。

「美味いか？」

「……………」

ナルコが黙々とおにぎりを口に運ぶのを見て、イルカはやがて聞くのをやめた。階下からは新入生たちのはしやいだ声が聞こえてくる。ここからは見えないが、もう少し柵の近くに寄ってみれば賑やかに帰宅する親子たちの姿が伺えるだろう。

「……明日からはな、親も来なくなるから」

「……………」

ナルコはやはり答えず、やがておにぎりを全て平らげると、包んであつたラップをポケットに突っ込んで帰っていった。結局ずっと表情を変えず、礼も言わなかった。そして、もうその頃には階下に人気はなかった。

ナルコのアカデミーでの生活は意外なほど順調だった。

親から吹き込まれたのか、級友から無視されたり馬鹿にされることは多かったが、別に陰湿な嫌がらせ等は受けず、ナルコはごく普通に授業に取り組むことができた。むしろ家ですることがない分、宿題と予習復習は完璧で、優等生とすら言えた。

ただ、ニコリとも笑わず喋らないナルコは、偶に氣遣って掛かる声すら無言で返し、友人関係の進展はさっぱり無いままだった。

ところで、ナルコのこの異常なほど内向的な性格は幼少期の経験を元に形成されたものなのだが、それ以前までさかのぼってみると、本来のナルコは天真爛漫で、屈託のな

い笑顔の似合う、明るい性格の持ち主であった。

そしてそのような生来の気質は閉じ込めることは出来ても無くなる訳ではない。

そうすると、自然と彼女の好奇心や行動力といったものは精神の牢獄とも言える己の内側へと向けられ、例えば『人は何故生きているのだろう』とか『人は何故こんな形なんだろう』とか、そのようなことばかりをナルコに考えさせた。

そして後に残るのはいつも『無』であった。

いわゆる無我。驚くことに、ナルコは弱冠六歳にしてある種の悟りを開いていた。

その為か。ナルコは己の内側については恐ろしいほどに敏感だった。

それに気がついたのはアカデミーに入学して一月ほどだったか。授業で教えられた『チャクラ』が切っ掛けだった。

『いいか、チャクラとは身体エネルギーと精神エネルギーをヘソの辺りで混ぜ合わせることで生まれる力だ』

ナルコはそれを聞いて怪訝に思った。

何故なら、己の内側からは三つのエネルギーを感じられたからだ。

一つは身体エネルギー、もう一つは精神エネルギーで間違いなかった。イルカに言われた通り、この二つを丹田にて練り合わせることで滞りなくチャクラを精製することが出来たからだ。

問題は正体不明の三つ目のエネルギーだった。いや、これはエネルギーというより、練り合わせた後のチャクラの方に性質が近いような気がした。

練り合わせる必要のあるチャクラと元々そこにあるチャクラ。この二つを視覚的なイメージで捉えると、自身が精製した方を『青チャクラ』元からあつた方を『赤チャクラ』と認識することが出来た。

赤チャクラはより大きく、融通が利かない。青チャクラは小さいが、扱いやすい。ナルコは試しに、アカデミーで習ったばかりの分身の術を赤チャクラで試してみた。

青チャクラではあつさりとし己の分身を作り出すことが出来たが、赤チャクラではまずチャクラを引つ張り出すところから苦労した。

———どうやら本当に、自身の中には謎の力が眠っているらしい。

それを自覚した瞬間、ナルコは赤チャクラのトレーニングを開始していた。それが強くなる為の……誰にも頼らず、一人で生きていく為の一番の近道だと、無意識の内に理解したのだった。

「そ、そ、そ……」

ナルコがアカデミーに入学してから四ヶ月が経とうとしていた。

前期も終盤へと差し掛かり、本日は最終的な体術の成績を決める為、グラウンドでは

忍び組手の試験が行われていた。

「両者、和解の印を！」

号令と共に、たった今勝敗の別れた二人が二本指を重ね合う。こうさせることでアカデミー生同士の遺恨沙汰を防いでいるのだ。

教官であるイルカはそれを見届けると今の試合結果を戦績表に記帳し、次の組である二人の名を呼びあげた。

「次、うちはサスケ、うずまきナルコ！」

今年の一年生は全校で九〇人。ひとクラス三〇人で、男子のクラスが二つとくノークラス一つとで綺麗に別れている。故に、通常ならば男子と女子とで授業は別々になるのだが、今回は一年生初めての試験である為、レクリエーションの意味も込めて一年全体、男女合同での実施がされていた。

といっても男子と女子とが実際に組手をする訳ではないのだが、一年生の男女でそれぞれ一名づつの欠員が出た為、一組だけは止む無く男女ペアとなっていた。

「両者、対等の印を！」

イルカの号令に合わせ、ナルコと相手方の男子生徒が片手印をつくる。

人間関係の一切を遮断するナルコは知る由もなかったが、その男子生徒は名家出身のエリートで、更に端正な顔立ちをしていることからくノ一からの評判が非常に良かった。

た。

「あーあ、私もサスケくんが良かったなあ」

「私もー！ 手取り足取り教えて貰いたかったー！ ってか何でナルコが…」

「サスケくん！ そんな無口女ぶつ飛ばしちやっついていいからねー！」

「……ふ、ふん」

まだ女子たちの黄色い声援に慣れていないのか、サスケと呼ばれた男子生徒は少し照れていた。しかしナルコの姿を確認すると一転してふて腐れた様子で「女が相手かよ……これじゃあ勝つても兄さんに自慢できないじゃないか…」と呟いていた。

そしてその声は、ナルコに届くことはなかった。

勝負は一瞬でついた。

いま地面に尻餅をついているのがサスケで、それを悠然と見下ろしているのがナルコだった。

中忍のイルカですら何が起こったか知覚できず、ただ呆然としていた。解つたのは、ナルコが一瞬でサスケに接近し、倒した。ただそれだけであった。

静寂の後、わあつ、と歓声があがった。その殆どは男子生徒で、サスケの女子人気をやっかんでいた者たちだったが、中には女子も混じっていた。

「あの女つえー！　サスケって男子でも一番なのに！」

「一年最強は女ってことかよ」

「ナルコちゃんすごーい！」

「なーんだ、うちはも大したことないじゃん……」

「……っ！」

サスケは尻餅をついたまま、群衆の中からうちはの名を出した生徒を見つけ出し、睨みつけた。その生徒も普段の授業ではサスケに勝ったことがないので、怯んだように人垣の後ろへと後退する。

「ーくそつ、オイお前！」

「あつ、おいサスケ！　和解の印はどうした！」

サスケはイルカの言葉すら無視して、自身の勝利に対して何の感慨も抱いていなさそうな、どこまでも無表情なナルコへと駆け寄っていった。

「ーこいつ、いったい何者だ！」

対面して、サスケは改めて目の前の少女を見据えた。

特徴的な金髪は肩のあたりで乱雑に切り落とされている。恐らく自分でやったのだろう、前髪も眉の上でガタガタの線を描いていて、まるで折れ線グラフのようだった。

身なりは相当に貧相だ。服などしわくちやで、所々に穴が空いているし薄汚い。

「ーこんなやつに……！」

サスケは歯噛みしながらお互いの顔がぶつかるギリギリまで近付き、至近距離でその瞳を確認した。

……暗い青色をしている。

「ーおかしい。さつきはこうじゃなかった。」

イルカの開始の合図と共に、サスケはナルコの瞳孔が縦に割れたのを確認していた。そして次の瞬間、やけに周囲がスローモーションに見えて、その中でナルコだけが普通に動いていたのだ。

そしてナルコはその時、瞳の色と同じ赤いチャクラを全身に纏っていた。

「ーこいつの強さの秘密を暴いてやる！」

「ナルコっていったか……お前、オレに付き合え!!」

「「ええー!」」

グラウンドに、くノ一たちの甲高い悲鳴が響き渡った。

## 2話

初夏の日差しを受け、水面がキラキラときらめいている。

あのグラウンドの一件から既に放課後となっていた。

ナルコはいま、サスケから受けた誘いと女子一同の呼び出しを見事に無視して河原の土手に腰を下ろしている。そして考えるのはやはりあの赤いチャクラのことだった。

ナルコは今日の忍び組手で一瞬だけ赤チャクラを使用していた。

赤チャクラは一定以上引き出すと、ナルコの全身に鎧のように纏わり付き、更には尾てい骨の辺りに尻尾まで生やす。

ナルコは今回、この全身の赤チャクラによって強化された俊敏性と、尻尾をバネのように圧縮・伸張させることによって瞬身し、周囲に不信感を抱かせずに赤チャクラトレーニングの成果を確認していた。

——これで少なくとも、自分は普通のアカデミー生よりは強いということだ。ナルコは久し振りにニコリと微笑んだ。

やはりその目に光はなかったが、これで里の住民の理不尽な暴力、その大半からは逃れられるだろう……そう思うと、これまでの苦しい日々を僅かでも脱却したような心地

で嬉しかった。

しかし、まだ足りない。

ナルコは一般人より、そしてアカデミー生よりも強くなったが、それより強い忍びなど幾らでもいるのだ。むしろこの強い忍び——人を殺めるプロコそが、これからのナルコを脅かす最大の要因となることは目に見えている。

——まだ平穩の時は遠い

また直ぐに赤チャクラの特訓を始めよう。そう決心して、土手から素早く立ち上がった……その時であった。

「あつ！—— テメエ、何でこんなところにいやがんだ！」

「——！」

突然の大声に身体が硬直した。

今、ナルコに向かってズカズカと遠慮なしに歩いてくる髭面の大男。見覚えがあった。た。

『お前が少しでも幸せそうにしていると、ムカつくんだよ』

間違いない。二年前、ナルコの自宅に犬の死骸を放り込んだ男だった。

「うっ……」

「……は俺の家の近くだぞ！—— 近づくな！」

「……っ！」

ナルコはすぐに踵を返した。

少しでも早くこの男の意識から逃れたくて、走って家まで帰った。

そうやって逃げ帰って、玄関の扉を閉め、施錠をして、それを入念に確認して……ようやく安堵のため息を吐いた。

そしてすぐに絶望した。

中忍の目すら欺く強力な赤チャクラ。

それを操る自分は、もうあんな男よりもよっぽど強いはずだった。

だというのに現実の自分はアカデミーに入学する前と何ら変わらない。何処にいても目の敵にされ、憎まれ、そしてその度に怯えている。

報われたと思つた努力が、報われていなかった。

ナルコはとても立っていられず、その場で蹲ってしまった。涙は出ない。ただ冷や汗だけが額を濡らしていた。

ナルコの目標は誰とも関わりあいにならずに、自分だけで生きていくことだった。

故に何度か里を抜けようとしたこともあった。しかしその度に火影や暗部、上忍たち止められてしまう。ならばこの孤独は里の中で貫くしかない。そういう考えを持つていた。

そしてその目標は、自分が強くなれば最低限叶うものと考えていた。

——間違いだった。自分は幾ら強くなっても抑圧され続け、常に周囲の脅威から怯えながら一生を終えるのだ。

——この木の葉の里で。

立ち上がるうにも、足に力が入らない。ナルコは震える体を引きずってベッドへと向かった。

ピンポーン

安っぽい電子音が突然の来客を告げる。

「……………」

ふらつきながら、ナルコは再び玄関へと戻った。

過去の教訓から、ナルコが自宅で来客を無視することはない。そうするとドアを破壊されたり窓を割られたりするからだ。どうせ会うことになるなら、修理代がかからない方がいい。

警戒しながら扉を僅かに開くと、そこにいたのは本日の忍び組手でナルコとペアだった男子生徒、うちはサスケだった。

「……………ストーカーじゃないからな。住所はイルカから聞いたんだ……………忘れ物届けるって口実で」

そう言つてサスケが差し出したのは忍術の教科書だった。確かに、今日はこの教科書からも宿題が出ていた。このままではアカデミーまで取りに戻る羽目になつていたらう。

「……どうやら嫌がらせではなく、本当に親切心から届けてくれたらしい」

ナルコはそう理解すると、ドアの隙間から腕を伸ばして、ふらつく体をなんとか保ちながら教科書を受け取ろうとした。

しかし、教科書へと伸ばした手は宙を切ることとなる。サスケが避けたのだ。

「……やっぱり嫌がらせか？」

ナルコがそう思うと、教科書はクルリと返されて裏表紙があらわになる

そこには『うちはサスケ』と記名がされていた。

「言つたろ。住所を知る為の口実だつて。そもそも、放課後付き合へつて約束をお前が忘れ……」

突然、ドアの隙間から半分だけ見えていたナルコの白い顔がガクンと落ちた。

サスケは咄嗟にドアの間に半身を押し込んで、その細い体を受け止める。

「お、おい。なんだよ、しつかりしろ」

返答はない。

サスケはしばらくその場で途方に暮れたあと、少女の軽い体を担いで家の中へと入つ

て行った。

いま、ナルコは一面に薄く水の貼られた通路にいた。

「……………」

戸惑いながらも、足首の辺りまであるそれをザブザブとかき分けながら進んでいく。  
——自分は確か、先ほどまで自宅にいたはずだ。アカデミーの男子生徒と会い、話していたはずだ

不可解な状況だった。ナルコは自身の今いる場所にとんと心当たりがない。ここがどこなのか、何故ここにいるのか、誰にどうやって連れてこられたのか。その辺りの記憶が全くと言っていいほど欠如していた。

すると、進んでいた通路がふと開けた。

その先にあったのはとてつもなく大きい広間である。その広間には巨大な厳しい檻があつて……その奥に、何かが蠢いていた。

——獣のような息遣いが聞こえる

もしあの檻の中にいる何かが獣の類いならば、凄まじい巨躯であつた。

——自分など、一口で丸呑みにされるだろう

ナルコは恐怖し、通路口の前から一步も動くことが出来なでいた。

その時だった。暗がりにある獣の顎が、僅かに開いたように見えた。

【小娘エ…】

「!!」

地の底から響くような、禍々しい唸り声である。

【貴様…何しにここに来たア…】

相変わらず檻の中は暗がりになっていて声の主のことはよく見えはしない。しかし少なくとも知能のある生き物で、こちらと対話する意思があるらしい。

更に相手は檻に囚われており、対して自分は少し後退すれば狭い通路へと戻ることが出来る。もしあの檻に施設がなされていなかったとしても、あの巨体でこの通路は通れはしまい。

どうやら、自身の安全は確保されているようだ。

ナルコは意を決して、檻の獣へと口を開いた。

「( )はど( )だ」

【クク…知らんで来たのか】

獣は低く笑いながら、闇の中で爛々と光る双眸をナルコに向けている。素直に答える気はなさそうだった。

「……教えて下さい」

ナルコはあっさり下手に出てお願いをした。

これで駄目なら、アカデミーで習った幻術の解術でも試してみるつもりだった。

「……チツ、ここは貴様の中だ。そしてわしは九尾……木の葉の里の連中によつて囚われの身となった哀れな狐よ……」

「九尾……？ それにわたしの中つて……」

「そんなことはどうでも良い。それよりも小娘……貴様なぜ、昼間あの男を殺さなかった……」

昼間の男。あの髭面の大男の事を言っているのだろう。

「なぜそれを」

「知っているか、か？ 決まっている。わしも観ていたからだ……情けない。九尾の人柱力ともあろう者があんな輩に背を向けて逃げるとは……」

「人柱力……？」

「答える……なぜ殺さなかった。あの男にはお前も思うことがあつただろう」

「それは……」

ナルコの脳裏にあの日のことが過ぎる。

玄関で横たわる動物の死骸。

ただ自分と一緒にいたという理由で殺された可哀想な犬。

『なぜ自分にトラウマを植え付けた憎き相手を殺さなかったのか』

獣の質問に対する回答は簡単である。

——怖かったから

しかし、例えばあの男にナルコが確固たる意志を抱き立ち向かっていたとしても、果たして命まで取っていただろうか？

いや、それどころか僅かでも男を傷つけることが出来ただろうか？

「……………」

出来ない、とナルコは思った。精々が力を見せて脅すのが精一杯だろうと。

であれば、この質問の答えはもつと根本的な、子供ならば誰しも大人から教えられる、ごく当然のこととなる。

「そもそも、無闇に人を傷付けては駄目だから」

【どの口が言う】

獣はナルコの主張をピシヤリと遮った。

【貴様こそ、その謂れなき暴力を受けている張本人だろうが】

「……………」

ナルコはキョトンとして、いま自分の言われたことがいまいち理解出来ない、といった様子だった。

【おめでたいやつだ…里の連中から憎まれることを嫌うくせに、自分が何故そのような扱いを受けるのか…考えたこともないんだろう】

「……なかった。それが当然だと思ってたから」

【洗脳ってやつだな。里の奴らめ、九尾の人柱力がよつぽど怖いらしい…】  
「……お前は知っているのかっ」

ナルコが少し興奮した様子で、獣のいる檻へと駆け寄る。

「何故わたしが憎まれるのか。何故みんなわたしをー」

ガシャンッ！

獣の爪が檻の間を抜け、ナルコへと振り下ろされる。

【懐いてくるんじゃないやねエ！ 小娘ごときがア！ わしがお前の味方でも思ったか…!!】

激昂する獣の眼前。ナルコは咄嗟に体を引いて、何とかその凶爪から逃れていた。しかし勢い余って床に尻餅をついてしまう。

そして暗がりから伸びてきて、部分的にあらわとなった獣の手を見上げた。

それは人間のような五本指だった。そこに鋭利な鉤爪が付いている。

ーやはり、とてつもなくでかい

【ナルコ…貴様は孤独だ。一生な……しかし、そんな貴様の人生が少しでも楽になる方

法がある」

「ど、どうしたら…」

【憎め】

闇に浮かぶ獣の瞳が赤く揺れている。

その瞳の色を見ると、ナルコはだんだん意識が遠のいていくのを感じた。

【憎悪には憎悪で持つて返せ。馬鹿にしてきた奴を殺し、殴られたら首を掻き切り……己の意思で孤独となれ。周りを皆殺しにしてなア…】

【貴様には見込みがある……鈍い様で、確実にその内に巢食う闇は広がりを見せている。だからこそ、わしはチャクラをくれてやってやっているのだ…】

【憎め…怒りこそが、貴様の言う赤チャクラを引き出す為の条件だ…】

【そうすれば……わしも……】

「おいっ」

「！」

ナルコはその場から勢いよく立ち上がった。

腰を低くおろし、警戒し、無意識に赤チャクラを纏って。

「お前！ その姿……！」

続けて、ナルコは強化された両目で周囲を見渡した。

見覚えのある壁紙。間取り。足元のシーツ。

——自分の部屋だ

ナルコはいま、自室のベッドの上で戦いの構えを取っていた。

そしてそのベッドの横にはサスケがいる。驚いた様子でナルコを見上げ、手には何故か濡らされたタオルを持っていた。

「……………」

ナルコはとりあえず、赤チャクラを引つ込めた。

「あつ！ おい、それ！ どうやってるのかオレに教えてくれ！」

「……………」

ナルコはサスケの頼みを意に返さず、その手に持たれたタオルを指差す。

「これか？ お前体調が悪そうだったからな。母さんはいつも、オレが寝込んだ時は

頭にこれに乗せるんだ」

「……………」

「は？ あ、ああ、まあな。でもそれよりさっきの力を…」

「余計なことするな！」

怒号と共に、ナルコはサスケからタオルを引つたくった。

「おい、何だよ。こっちは親切心で」

「うっさい！ わたしを看病しようとしたことは誰にも喋るな。あとこの部屋に入ったこともだ」

「お、おい」

「でてけ。アカデミーで気安く話しかけてくんないよ」

サスケの背中をグイグイと押しして、ついには外へと叩き出す。

「いつてえな！」

バンツ！　そして間髪入れずに扉を閉める。

「おいナルコ！　開けろ！」

サスケが扉をドンドンと叩いてくるが、無視してベッドへと潜り込む。

——看病なんて以ての外だ！

ナルコは布団を被って丸まり、外界の音を遮断した。

——里の人間は自分に暴力を振るう。だというのに看病なんて、その行為を蔑ろにする行いだ！　このことが知られれば、先ほどの少年も、あの犬と同じ様に殺されるかもしれない。そして死体はこの部屋に投げ入れられるのだ

「ううっ……」

喉元までせり上がってきた胃液を無理やり飲み込む。

今日は色々な事が起こり過ぎた。意識を保っている事すら億劫だ。

もうナルコに出来ることといえば、このまま眠って明日を待つことぐらいだった。

「よう、ナルコ！」

翌日のアカデミーである。

定位置である教室の隅—窓側の一番前の席に一人座るナルコに、親しげな声がかかった。

「昨日は大丈夫だったか？ 結局最後まで面倒見てやれなかったからな」

「なにイイイ!?!」

アカデミーでは男子と女子とでクラスが分かれている。故にナルコが今いる教室も勿論くノークラスで、そうなれば当然、周囲はサスケファンのくノ一だらけとなるのは自明の理であった。

そしてその中の爆弾発言。更には見たことのないサスケの笑顔。

くノ一たちの嫉妬の視線が、一斉にナルコに集まった。

しかしサスケはそんなもの知らぬ存ぜぬで、目的の席までつかつかと歩み寄って行く。そのまま窓枠に腰掛けてナルコと対面した。

ナルコは出来るだけ周囲に悟られない様にサスケを睨みつけた。

「どっかいけ。それと昨日のこと話すなって言っただろ」

「行かねえし。だから話したんだよ」

サスケが意地の悪い笑みを浮かべる。

「やめて欲しかったらオレに教えろ。あの力のことを……オレは……！」

サスケの眼が一瞬赤く染まる。

「兄さんに認められたいんだ」

## 3話

蟬の大合唱が森林の静寂に上塗りされて鳴り響いている。

いま、ナルコがいる場所はうちは一族の私有地である森の中だった。故に当然、その隣にはサスケもいる。

二人は夏の日差しを避ける為、枝葉の影に入つて、木の幹を背もたれにして並んで座っていた。サスケは両足を放り出して、ナルコは体育座りで縮こまって。対照的な姿である。

「見ろよ。兄さんはあそこから手裏剣を投げて、あの大岩の後ろにある的に的中させたんだ」

「……………」

「同時に投げた手裏剣を互いにぶつけ合わせることで曲げるんだけど、あのくらい正確にやれるのは兄さんくらいだろうな…」

「……………」

「オレも毎日手裏剣の修行をつけてくれるよう頼んでるんだけど……兄さんはあの歳で部隊長だから忙しくて…」

もう一時間ほど、ナルコはこうやってサスケの兄自慢を聞かされていた。

初めの頃は兄弟とはこんな仲の良いものなのかと感心したものだったが、夏の暑さもあり、ナルコは早々に話の内容に関心を寄せることを放棄した。

日は既に中天へと差し掛かっている。

朝の内から始められた二人の密会は、すでに四時間を超過していた。

とはいえ、別段二人揃って仲良く森林浴に来ている訳ではない。そもそもこの会合は夏休み直前のアカデミーで、サスケがナルコに提案したある取引の元に成り立っていた。

『赤チャクラってやつを教えてください。そうすれば、オレは今後一切お前と関わりを持たない』

ナルコにとっては恐るべきことに、サスケがナルコの家を訪ねた翌日から始まり一週間。夏休みが始まる直前まで、サスケはナルコに付きっ切りだった。

当然、朝は家の前まで迎えに来て、男女合同の授業では近寄って話しかけてくるし、放課後は家まで付いてくる。そしてその話題の全ては『オレに赤チャクラを教えてください』だった。

もちろん人付き合いを嫌うナルコがそれを良しとするはずはなく、サスケが視界に入る度に自宅の窓から飛び降り、授業をサボり、全力で逃げる訳だが、どうもそれはそれ

で目立ってしまいうらしい。

実際問題、現在くノ一クラスでナルコの評価は地を這っている。

ならば手っ取り早く赤チャクラのことを教えてやった方が、場所や時間を選ぶことで人目も最小限となるし、結果的に接触も少なくて済むだろう……こういうことだった。

そして夏休み初日の今日、ナルコは眠たい目を擦りながら早起きをして、指定された場所——うちはの所有する森林でサスケと落ち合ったのだが……やはりと言うべきか。サスケには赤チャクラがなかった。

——やはり赤チャクラは自分だけの力だったのだ

そんな経緯で開始三時間ほどでナルコが帰ろうとしたところ、案の定落ち込んだサスケに捕まり、愚痴られ、己が強さを欲する理由——つまりはサスケの兄について語られ、そうやって一頻り話をされて……今こうなっているのであった。

「——でさあ」

「もう話しかけんな。あと、帰るから」

ナルコは意を決してサスケの話を遮った。

酷く不器用だが、これでも普段と比べれば柔らかく言った方だった。

ナルコはサスケと目を合わさなのまま、立ち上がって早足で木陰から出て行く。

「おい待て。まだオレの要件は終わってない」

「……三時間もかけて分かっただろ。おまえ赤チャクラないから無理だし帰る」  
「待てつて。赤チャクラは手段であつて、そもそもオレの目的は強くなる事だ」

「……？」

「もう一度、忍び組手をするぞ」

「――約束が違う」

振り返りながら、ナルコはそう思った。

「この前の試験でお前とやったとき、一瞬だけ周囲がスローモーションになって見えた  
……赤チャクラが無理なら、せめてあの感覚だけでも掴みたい」

「帰る」

素気無くするナルコに、サスケが表情を厳しくして言った。

「今日は帰さない」

ナルコとサスケの熱い視線が交差する。

「すぐに済むさ。お前がオレの言うことに大人しく従つて、スムーズに事が運べばな  
……ほんの二、三十分でいい」

「嫌だ。帰る」

「帰さないと言つたはずだ。そんな調子じゃ、場合によっては夜まで付き合ってもら  
ぜ」

「そんなに…体力持たない」

「だったら素直に付き合いな」

「でも」

「お前、何かと溜め込んでそうな性格だからな。この際、思いつきりやつてすつきりしたらどうだ」

「…ふう。わかった、すぐに済ませてやる」

「言ってる。お前が（痛みに）あえぐことになるぜ」

そう言うと、サスケはおもむろに自身の上着を脱ぎ捨てた。

母のミコトが日焼け対策にと羽織らせた薄手のものだったが、これから激しく動くにあたって邪魔になるとサスケは考えたのだ。

「ナルコ、お前も脱げよ…」

確かにこの猛暑…このままでは暑いだろう。

ナルコはひとつ頷くと、自身の一張羅であるオレンジの上着のチャックに指をかけた——

——ガサツ

「!?!」

突然のことである。

サスケの背後にあつた茂みの中から、人間の上半身が垂直に飛び出してきた。

――見られた！

ナルコは驚き、一瞬で冷や汗だらけになる。

――二人で訓練しているとところを見られた。サスケが酷い目に合うかもしれない。知らず、ナルコの目尻に涙が溜まっていく。

「兄さん！　今日は任務なんじゃ……」

「……兄さん？」

オウム返しにしたナルコ。そのまま現れた人影へと目をやると、なるほど。確かにそこにはサスケとよく似た、一回り年上の少年がいた。

――兄弟なら、サスケも大丈夫かもしれない

ナルコがそんな期待を抱く中、現在少年少女の視線を一身に受けているイタチは、自身の弟に目をやって、涙目のナルコを見て、もう一度サスケへと戻し……ようやくその口を開いた。

「サスケ……」

「兄さん、どうしたの？」

「……そういうのは、大きくなつてからだ」

忍び組手が？

二人の頭上に疑問符が浮かぶ。

「それも…無理やりしてはいけない。脅すような真似をしてすべきでもない…」  
諭すように言うイタチに、サスケはキョトンとして返す。

「いや、でも。アカデミーでは全員やってるし…」

「ー全員…だと…」

イタチが目を剥いて驚いている。

そんな動揺した兄の姿を見て、サスケは何かを察したように目を伏せた。

「……そうだよ。兄さんは、アカデミーを七歳で卒業したんだから知らなくて当然か  
…」

「そんな…サスケ、それは本気で言っているのか…アカデミーでそんな事を…」

「?」 当たり前だろ。ちゃんと先生から教えて貰ったぜ」

嘘だろう、と呟くイタチ。

「ほ、本当にしているのか…」

「ああ、してるさ。普段は男女別でするけど」

「男女別!?」 そ、それはどういう意味だ…!」

「え?」 そりゃあ、男なら男同士でって事だけ…」

遂にイタチは限界を迎えた。

足元がふらついで、空を泳いでいるような心地だった。

「クツ…父さんと母さんの所へいくぞ！　お前たちも来い！」

「え？　に、兄さん!?!」

「わたしは帰るから離せ！」

イタチは二人を引き連れて、自宅へと向かって行った。

「ぐっ、ふふっ、ふふふ…」

「ちよつと、笑わないでよ。イタチが…ふふっ、か、可哀想じゃない…」

「いや、すまん。くくっ、しかしあのイタチがこんな勘違いをするとは…くくっ…」

イタチとサスケの自宅である。

その居間で、家族四人とナルコはテーブルを囲んで座っていた。

父のフガクが窓側に鎮座し、その対面にサスケとナルコ。テーブルの両端にはそれぞれイタチと母ミコトが腰を下ろしている。

「くっ…すまなかつたな…サスケ…」

「いいけど。兄さん、忍び組手と何を勘違いしたんだ？」

サスケのピュアな質問に、また両親が噴き出した。

「そう何度も聞いてやるなサスケ。イタチもお年頃ということだ…」

「もう、やめなさいって……」

なおも冗談を言うフガクが、ミコトによって窘められる。

「いや。実の所、少し安心したんだ。こいつも人の子だったのだなど、そう思ってたな……」

そうやってどこか遠い目をするフガクに、サスケは少し拗ねたようにして言った。

「何言ってるんだよ。父さんはいつも、兄さんに流石オレの子だって言ってるじゃないか……最近あまり聞かなくなっただけだよ……」

「くくつ、確かにそうだったな……イタチ」

フガクが悪戯っぽく笑う。

「さすがはオレの子だ。そっち方面もな」

「と、父さん……」

「もう！ やめなさい！」

ミコトの執り成しによりその場は一段落ついた。イタチはまだ少し恥ずかしそうにしていたが、すぐに冷静さを取り戻し、自室へと戻って行った。

そして今。サスケの両親の視線は、一人居心地の悪そうにしている少女へと向けられている。

「うずまきナルコ……と言ったね……」

「……………」

ナルコは答えない。常に俯きがちで、周囲を落ち着きなく見回している。返事のないナルコに、フガクが再び口を開いた。

「アカデミーで息子が世話になつていようだ」

「……………」

ナルコは答えない。

「ふむ」

ひと時の静寂。

「単刀直入に言う。これ以上息子とは関わらないでくれ」

「あなた！」

夫がした残酷な要求を、ミコトが咎める。

「こういうのは早い方がいい。ナルコさん。赤チャクラだったか……確かに君の中には特別な力がある。特別で、とても危険な力だ」

ナルコが顔を上げ、初めてフガクと目を合わせる。

「……………何か知ってるのか」

「よく知っている。君の中に眠る『九尾』のことは」

「……………九尾」

ナルコの頭に、あの檻の中に閉じ込められた巨大な獣の姿が思い浮かんだ。

「とにかく、その力を御せない限り、君の近くにすることは息子にとって害でしかない」  
「言い方つてもものがあるでしょう！」

我慢ならないとばかりにミコトが立ち上がり、睨みつける。それに対してフガクは己の妻をただ見据えるだけだった。

「ではお前が言うか」

「！」

「友人の娘に。私の息子に近付かないでくれと……言えるか」

「……！」

「わたしはいいけど」

そのときだった。

ふと、ナルコの声が出た。

「そもそも近付いて来たのはお前らの息子だから。話しかけるなって言ってるのに」

それは何の悲しみも感じられない、落ち着いた声音だった。

「組手も、別に付き合うつもりなかったし。約束通りなら、コイツに赤チャクラないって分かった時点で……取引で、コイツはわたしに話しかけたら駄目だったのに」

「ちよ、ちよっと待って」

ミコトが慌てて、ナルコの話に割って入る。

「ナルコちゃん、その約束って…?」

「……………」

言うべきか、少しの間逡巡するナルコ。

「……赤チャクラ教えたら、もう関わらないって約束。コイツから言ってきたのに破った」

ナルコが隣に座るサスケを指差す。

「お、おいナルコ…」

「サスケ!! あんた何でそんな約束したの! アカデミーでナルコちゃんのこと虐めてるんじゃないでしょうね!」

「い、虐めてるワケないだろ! こいつオレより強いし…!」

怒りを露わにする母に弁明を続けるサスケ。

「ナルコは普段から友達とか嫌がつてるんだよ。話さないし、誰とも関わろうとしないし……一人が好きなんだなって思ってた……それで……」

「だからってあんた……」

再び、ナルコへと目を向けるミコト。

ナルコは相変わらず――級友の親から「息子と関わるな」と言われたにも関わらず、冷静な様子だった。

「……コイツの言ってることは合ってる」

「!!」

「わたしは誰とも話したくない。関わりたくない。お前らとこうしてるのも嫌だ」

「ナ、ナルコちゃん……?」

「わたしに関わったら、お前らも酷い目に合うぞ」

「ミコトがその時覗き込んだナルコの目は、決して六歳の少女がしていいものではなかった。」

諦めと、達観と、絶望。それらが複雑に絡み合って、彼女の青い瞳を闇一色に染め上げていく。まるで、暗い井戸の中を覗き込んでいるようだった。

「ナルコちゃん……」

いつの間にか、ミコトの頬には涙が伝っていた。

「賢い子だ。話が早くて助かる」

フガクは微動だにせずにそう言った。

夫婦だけが残る居間にはもう、ミコトの静かな嗚咽が響くだけだった。

「ナルコ!」

夕焼けの中、一人うちはの敷地から出て行くナルコにサスケの声が掛かった。

「……………」

ナルコの歩みが止まる。

「お前、明日もまたウチの森来いよ！ 組手するから！」

ナルコは振り向かずに聞いている。

「来なかつたらあのこと言い触らすからな！」

「どうぞで」

即答だった。

ナルコはもう、それ以上何の反応もしないで歩みを再開した。

サスケの一家は、ナルコが初めて身近で目の当たりにした家族だった。

自分も含めて五人でテーブルを囲み、イタチの勘違いについて笑い合う。あのひとは、まるでナルコ自身もその一員になったかのように、くすぐったくて、落ち着かなかった。

『これ以上息子とは関わらないでくれ』

……一人ぼっちの六歳の少女が、傷付かないはずがなかった。

夕暮れどきの町で、ナルコは一人家路を急いだ。

## 4話

サスケの手裏剣術はアカデミーの一年生の中でも断トツで一番である。

物心つく前から優秀な兄に師事し、暇さえあれば磨いてきた手裏剣の腕。森の修練場にて、いまそれが遺憾無く発揮されていた。

「はっー！」

一息で放られた手裏剣は二枚。緩くカーブを描きながら的の中心……それも先に刺さっていた三枚を上手く避ける位置へと突き立つ。

「ふっー！」

続けて、本日ちようど百枚目となる手裏剣を投じる。手裏剣は先ほどと同じ様な軌跡を描きながら的へと向かっていき……弾かれた。角度的に刃が立っていなかったのである。初歩的なミスだった。

「ぐっ……」

サスケは苛だたしげに傍に立つ木の幹を蹴りつけた。

今日はこのような、自分らしくないミスが頻発していた。

原因は分かっている。三日前にこの森に……そして自宅にまで招くこととなった、あ

の金髪の級友のせいだ。

ー笑っていたような気がした

ナルコがサスケの家を訪れたあの日……イタチの事で、五人でテーブルを囲んでいた  
ときのことだった。

サスケがふと隣に座るナルコに目をやると、彼女はモゾモゾと落ち着きのない様子  
で、しかしほんの僅かに頬を緩めているように見えた。

それはサスケが初めて見る、ナルコの無表情以外の表情だった。

しかしそれも長くは続かない。

『これ以上息子とは関わらないでくれ』

父の言葉がサスケの耳にリフレインする。

その瞬間、彼女はサスケの知る普段通りのナルコとなっていたのである。

サスケの頭の中で、柔らかく笑うナルコと、そしてあの夕焼の元に一人去って行った  
ナルコとが浮かび上がり、重なった。

「ああつ、くそー！」

これ以上思い悩んでいても修行に身など入るはずがない。

原因は分かっているのだ。だったら行動すればいい。

サスケは手にしていた訓練用のクナイを無造作にポケットへと突っ込むと、ナルコの

家へと向かって駆けていった。

ナルコはこの三日間、赤チャクラトレーニングにより一層励んでいた。

『九尾の力を御せない限り息子に害が及ぶ』

サスケ宅で、フガクが口にしていたことである。

今となつてはナルコも理解していた。

赤チャクラとは、自身の内に眠るあの巨大な獣——九尾のチャクラのことだったのだと。

これまでの周囲の視線を思い出してみると、確かに記憶の中の彼らはナルコを見ている様で、その実別の何かを恐れていたようだった。

——あれは九尾が原因だったのだ。里の大人は、突発的な九尾の暴走に巻き込まれることを恐れ、その宿り主である自分を遠巻きにしていたのだ

——であれば、自身が九尾のチャクラを完全にコントロールするに至れば、全てが解決するのではないか。

そういう経緯で、このトレーニングは開始された。

ナルコはまず赤チャクラ——つまりは九尾チャクラで尻尾のみを生み出し、日常生活に必要な動作は出来る限りこれだけでこなすよう心掛けた。

尻尾でフォークを持ち、皿を洗い、本を読んだのである。

一日目は失敗の連続だった。

いまナルコの家にある食器類はほぼ全て曲がったり壊れたりしているし、本はズバズタになったのでゴミ袋に押し込んである。

しかし二日目、三日目と続けていく内に、一日目は怖くて尻尾で触れられなかった蛇口を、時間はかかるものの、ナルコは捻ることが出来るようになっていた。他にも電気のスイッチ、トースター、ガスコンロ。これらの比較的壊れたら困る物も、尻尾のみの操作で使用出来るようになった。

三日という短期間にも関わらず、ナルコは目に見えて尻尾の扱い方を成熟させていたのだった。

ナルコがクナイを構える。

いや、正確にはナルコの尾でい骨から伸びる九尾の尻尾が、クナイを掴んで弓の如くしなっている。

ナルコは大きく息を吸い込むと、尻尾に全神経を集中させた。

そして、解き放つ。

尻尾が投じたクナイは、人の腕では到底成し得ない速さと力を持ち、ナルコ手製の木

の的へと突き立った。しかも次の瞬間には貫通し、クッション代わりに置いてあった雑誌の束の中頃まで、その刃先を埋め込んだ。

ナルコはそれを見届けると、今度は尻尾で手裏剣を掴み、上部へと放り投げた。

そして落ちてきたそれを、中央の穴の部分に尻尾の先を通してキャッチすると、フラフープの要領で回して、そのまま先程の的へと投げつける。

威力こそ通常と然程変わらないものの、関節の可動範囲が人間の手首とは大きく異なる尻尾から繰り出される手裏剣術は、訓練次第では障害物の前で大きくカーブして対象を捉えることが可能になるだろう。

——まだそこまで尻尾をコントロールすることは出来ないが、いずれはその領域まで達してみせる

ナルコは意気込みを新たにすると、メチャクチャに散らかった自身の部屋を改めて見渡した。

——修行の為とはいえ、流石にやり過ぎた

尻尾の修行を初めて三日目の夜。そろそろ一段落つけて部屋を片付けようかと、ナルコが重い腰を上げたときだった。

ピンポンと、玄関のチャイムが鳴った。

「……………」

このごろ、このチャイムはめつきりその活躍の機会を多くしている。その原因は言うまでもなくサスケであり、その彼とは三日前に縁を切ったはずだった。

では誰がこんな夜更けに。

ナルコはそんな思いと共にロックを外し、僅かな隙間を作るようにして外を覗き見た。

そこに居たのはサスケーではなく、彼に良く似た顔の兄、うちはイタチであった。

三日前に会ったときと随分印象が違う。

彼の背後に広がる夜闇がよく似合っていた。

「サスケを見なかったか」

イタチはナルコにノータイムでそう質問をした。普段は礼儀正しい彼がこのような態度を取るということは相当に焦っているらしい。

もちろん、その普段を知らないナルコにはそんな判断はつかないが。

「見てない」

「そうか。すまない、少し中を見せてもらおう」

「何を……」

イタチは扉ごとナルコを突き飛ばし、部屋の中へと押し入ってきた。

ナルコは勢いのままに玄関の床に尻餅をつく。

「……ナルコさん。随分と部屋が荒れているな」

「……出てけよ」

ナルコがそのままの状態では顔を上げると、殺気と共にこちらを見下ろしてくる、完全に表情の抜け落ちたイタチと目が合った。

その瞳には、黒い斑点のような模様が三つ浮かんでいる。

「知っていることを吐け。ここで何があった」

「うるさい出てー」

瞬間、ナルコの小さな体は部屋の壁へと叩きつけられていた。

「がはっ……」

ー脚の裏が地面を感じない。宙ぶらりんの状態だ。首に圧迫感。強い力で締め付けられている

「答えろ。サスケはどこだ」

ナルコの首を腕一本で締め上げ、壁に固定しながらイタチはそう質問をする。

「答えなければ殺す。」

その赤い瞳が告げていた。

「ぐっ……し、知らない……」

「ではこの部屋の惨状は何だ。説明しろ」

「しゆ、修行……」

「こんなにしてしまうなら、何故部屋でする必要があつた」

「誰にも……見られたく……なかつ……」

イタチがナルコの首を解放する。

拘束の外れたナルコはそのまま床へとずり落ち、蹲つて激しくえづいた。

しかしイタチはナルコの呼吸が整うのを待つことなく、今度はその髪を掴んで顔を上向きにすると、強制的に自身の眼と合わせた。

「もう喋らなくていい」

うちはの血継限界、写輪眼が発動する。

イタチはナルコの記憶の中へと入り込み、今日一日中を隅々まで調べ上げ……そこまでしてようやく、その無実を理解した。

「……すまない」

イタチがナルコの髪から手を離し、軽く手櫛で整えてから離れる。

「本当に君は何も知らないようだ」

「……アイツに何かあつたのか」

「このアパート周辺の裏路地に、サスケの訓練用のクナイが落ちていた。刃には血痕が付着しており、あいつは朝の稽古からずっと帰って来ていない」

イタチはそう言うと言を返して、扉が開けっ放しの玄関へと向かった。

「すまない、急いでいる。後日必ず、正式に詫びをしに来る」

「待て！」

ナルコが叫び、玄関へと駆け寄る。

イタチが扉から出て行き、続いてナルコも外へと飛び出る。

誰も居ない。

イタチは一瞬にしてその場から消え去っていた。

「……………」

『このアパート周辺の裏路地に、サスケの訓練用のクナイが落ちていた。刃には血痕が付着しており、あいつは朝の稽古からずっと帰って来ていない』

ナルコは部屋へと戻り、枕元の目覚まし時計へと目を向けた。

時刻は午後十一時三〇分を回っている。

三日前、ナルコがサスケとうちはの修練場で待ち合わせたのは朝の七時だった。

サスケが普段もそれくらいの時間から朝の修行を始めているとすると、彼が姿を消してから、実に十六時間以上が経過したということになる。

更にはサスケが何者かと争った形跡すら見つかっていない。

『お前、明日もまたウチの森来いよ！ 組手するから！』

「……っ！」

気がつけば、ナルコは走り出していった。

彼女自身も何故なのかは分からない。ただ形容しがたい熱い衝動が、その小さな体を急き立てていた。

ナルコは着の身着のまま靴すら履かず、一秒も惜しいとばかりに窓から飛び降りて夜の木の葉の里を疾走する。

夜の街を歩く人々が何事かとナルコを見る。

夜中に一人裸足で走る九尾の子供。

みな一様に眉を顰め、怪訝な顔をする。

嫌なものを見た顔と顔を背ける者や、せせら笑う者さえいる。

ナルコはそれ等を意識の端に追いやって走り続ける。

——サスケは言っていた。兄はとても優秀だと。アカデミーを七歳で卒業したのだと

——そのイタチがとても取り乱していた。サスケの失踪が何者かの手によるものと確信していたからだ

——優秀なイタチがそう考えているなら、勿論うちは一族にもその情報は伝わっていない筈だ

「ーそしてうちはは、血を守るために一族をあげてサスケを捜索しているだろう。それこそシラミ潰しに」

ナルコは結論を得る。

「ー里の中にサスケがいたとしても、それはうちは一族が見つかるだろう。自分が役に立つとすれば、それは捜索の目が行き届いていない里の外」

行動の方針は決まった。あとは実行に移すだけだ。

「……………ふっ」

ナルコは九尾のチャクラを纏うと、更にスピードを上げて夜の闇へと消えていった。

木の葉隠れの里から少し離れた森の中。夜の虫たちのさざめきに混じり、二人の男の声が聞こえてくる。

「おい、失態だぜ。木の葉の写輪眼を手にするつもりが……………まさか一族でも使えない奴がいるなんてよ……」

男の一人。バツ印の仮面を付けた方が、側に転がる少年を指差しながら言う。

その少年はうちはサスケであった。手首は麻紐で拘束されて背中に回され、猿轡を咬まされて虚ろな目で横たわっている。男たちに幻術をかけられているのだろう。そうであるなら、サスケはいま虚ろな夢の中にいるに違いなかった。

「……おそらく餓鬼だからまだ開眼していないんだろう。うちは一族には違いないさ。素養はある」

もう片方の、丸印の仮面の男がそう言う。

「そうか？ やはりもう一度引き返して写輪眼使える奴を攫ってきた方がいいんじゃないかねえかな」

「馬鹿なことを言うな。今頃木の葉では、うちは一族が躍起になって餓鬼を探しているところだろう。ここもいつ追っ手に嗅ぎ付かれるか分からん」

「だがな……クライアントが欲しがったのは写輪眼だけ」

「そのクライアントが『うちは一族の者を一人攫ってこい』と言ったんだ。任務は完了だ」

「……はいはい、わかったよ」

話し合いに結論が出たのか、横に置いてあった荷物を担ぎ直す丸印の男。

「俺の幻術で餓鬼から写輪眼の有無については聞き出せた。その際に一度解いた、餓鬼を夢心地にする方の幻術も改めて掛け直した。小休止は終わりだ。出るぞ、お前も餓鬼を担ぎ直せ、バツ」

「待て。その前に用便」

「ちっ、先にしておけ。おい、ワイヤーには触るなよ」

「わかってるよ」

悪びれる様子もなく「さつきから腹痛くてさー」と言いながら林の中へと入っていく。バツ印の男。丸印の男はもう一度舌打ちをして、それを見送った。

そのときだった。

バツ印の男が向かった林と反対方向。木々の間に、ゆらりと揺れる人影があった。

「バツ！ 何者かいるぞー！」

「あ!? くそっ…」

「俺が見てくる！ お前は直ぐに餓鬼のところへ戻れ！」

「待って。さつきからやけに腹が痛くて…」

丸印の男が一瞬でその場から消える。

そしてそれと殆ど行き違いで、バツ印の男がズボンを上げながら戻ってきてー

「なに？」

「ー餓鬼がない

「おいマル！ 餓鬼がいねえぞー！」

「……！」

丸印の男が急いで戻ってくる。

見ると、あの子供の両手足を縛っていたはずの麻紐と猿轡、そして数滴の血液が土の

上に落ちていた。

「マル！ お前がさつき見た何者かの仕業だ！」

「ちつ、全く気配がなかったぞ。どういうことだ……そもそも周囲にはワイヤーを巡らせて警戒体制は十全だった。それを……」

機能しなかったワイヤーによる警報。

消えた謎の人影。

そして気配なく一瞬で子供を――

そこで、丸印の男が何かに気がついたように顔を上げた。

「おいバツ！ お前、あの餓鬼をずっと担いでたしろ！ 上半身を背中側にして！」

「あ、ああ」

「そのとき、餓鬼の手がお前のポーチに当たってなかったか！」  
「！」

バツ印の男が腰の忍具入れを開き、中身を確認する。

「クナイが一本と毒の瓶がねえ！」

「ちつ、スられたんだ。お前の腹痛はその毒によるものだ。お前は自分の使う毒に耐性があるから腹痛程度で済んだみたいだが……」

「待て、木の葉から運んでる最中も、餓鬼には幻術にかけてたろ」

そんなこと出来るはずがない、と続けるバツ印の男。それに対して、やはり舌打ちしながら答える丸印。

「だから、解いたんだろ。餓鬼の分際で俺の幻術を……時間はかかったみたいだがな。そしてお前に担がれながら、運搬時の振動で腕が当たったように見せかけ、クナイと毒をスった。毒はお前の水筒にでも入れたんだろう……あの餓鬼には運の悪いことに、ただの腹痛で終わっちまったがな」

「じゃあ人影つてのは……」

「餓鬼の分身だ。お前からスツたクナイで拘束を断ち、手を後ろに回したまま印を結んだんだ。気配がなかったのも、一瞬で現れたのも頷ける。それに餓鬼でも使えるしな。ワイヤーが機能しなかったのもそういうことだ……ただの分身には実体がない。あの餓鬼はそうやってまんまと俺たちを出し抜いて、一瞬のスキを突いて幻術を解き、逃げ出したのさ」

「……クソ！ まだ遠くまで行つてねえはずだ！ しよせん餓鬼だ！ 馬鹿正直に木の葉の方に向かってるだろ！ 行くぞマル！」

「まあ、待て」

焦るバツ印の男とは対照的に、僅かな笑みさえ浮かべる丸印の男。

「話を聞いてたか？ ワイヤーによる警報は動作していない、俺はそう言ったんだぞ」

「……………」

「——餓鬼はまだ逃げていない。ワイヤーの内側に……………この周辺にいる」

チリン！

鈴の音が夜の森に響く。

ワイヤーの警報である。

「ふん、賢しい餓鬼め！　身を潜めて俺たちのことを監視していたか！　バツ！

お前よりよっぽど頭の出来が良い！」

「うるせえ！　音は木の葉方向からだ、追うぞ！」

仮面を付けた二人の男が動き出す。

そして彼らから数十メートル離れた位置。手首に生々しく拘束跡の残る少年が全力で駆けている。

サスケである。

額からは幾筋もの汗が伝い、全身は恐怖からか小刻みに震えている。

今日の夕方頃に木の葉の裏路地で男たちに捕まっただけで、サスケの意識は幻術の中にあつた。

解術出来たのはつい先程——男たちが小休止と称してサスケに写輪眼を使えるかどうかを聞いたです……………その直前である。

「――危なかった。首尾よく逃げ出せはしたが、次捕まれば今度こそ終わりだろう。」

「――とにかく、今は少しでも早く脚を動かさなければ」

「くっ……」

手のひらが痛んだ。写輪眼についての質問が済み、改めてかけられた幻術を解く為に付けた傷だった。しかし、あれほどの危機をこの傷一つで切り抜けられたのだから我儘は言えない。

サスケは月を見上げる。時刻は亥の時。

「――オレがナルコの所に向かったのは午後四時を過ぎてからだだった。その道すがら捕まって……今が午後十時ごろ」

「くそっ……」

「――拐われてから五、六時間は経っている。もう、里からは随分と離れているのだろう。」

サスケの状況は絶望的だった。

しかし、確かな希望もあった。

修練場でポケツトに放り込んで、そのままになっていたクナイ。

サスケはそれを、仮面の男二人に裏路地で囲まれた際、投げ放っていたのだ。もちろんそのクナイは避けられたが、サスケはあらかじめ扱いを誤った振りをして、クナイの

刃に自身の血を付着させていた。

サスケはそれを、救難信号としたのである。  
きつと助けてくれる筈だ。

木の葉警務部隊隊長の父と、優秀な兄が。

「それまで逃げきってやる……絶対に……」

サスケは木の葉隠れの里とは逆方向に逃げながらそう小声で呟いた。

サスケはワイヤーの警報に触れた瞬間に、木の葉方向から逆方向へと進路を変更して  
いたのである。

男たちを騙す為。そして時間を稼げば絶対に助けが来る……そう信じて。

こうして、サスケの孤独な逃亡劇が始まったのだった。

## 5話

木の葉隠れの里からしばらく離れた森林地帯。その一角に、一人林に身を潜める幼い少年の姿があつた。

サスケである。

あの仮面の男たちの元から脱してから三時間。当初木の葉とは逆方向に向かつていたサスケは、男たちと十分に距離がとれたことを確信すると、動く事を止め、息を潜めて夜が明けるのを待つことにしていた。

幸い先ほど述べた通り、サスケは木の葉がどの方角にあるか目星が付いている。

まだ6歳の子供とはいえ、サスケは名門のうちは一族にその名を連ねる、産まれながらのエリートである。故に当然、父のフガクより優れた忍びになる為の英才教育を施されてきた。そしてその中には里周辺の地理についての勉強も含まれていたのである。

サスケは夜の闇に塗り潰されて真っ黒になつている山々を見つめた。木の葉の里で見る景色とは異なるが、見覚えのある連なりに、ある程度の判別がついた。

しかし、そうやって導き出された木の葉へのルートの中には、当然あの男たちとの再会のリスクも潜んでいる。ならばと大きく迂回して里へと向かおうにも、そこまで細や

かな地形の把握までは出来ない。

サスケが予測するに、ここは木の葉から大体忍の足で二、三時間ほどの位置。当初予想していたよりも里から離れておらず、であればあの男たちとて、この周辺でいつまでもウロウロすることは避けたいはずだった。

ーやはりいま自分に出来るのは動かずにいることだ

自身の今とつている行動に対して自信を深めながら、サスケは油断なく周囲の暗闇を見渡し続ける。

長時間にわたる神経を使う作業である。

男たちはいつ何処から現れるか分からない。

雲の隙間から見え隠れする柔らかい月明かりだけが、サスケにとつての慰めだった。

「……………」

遠くから、うおおん…と獣の遠吠えが聞こえてくる。

野犬か、狼か。判別はつかないが、あの犬塚一族のキバならば声だけで分かるのだから、とサスケは何となく疑問に思う。

犬塚キバとはいつも子犬を連れていてる男子アカデミー生だ。サスケが朝方里をラッピングしていると、よくその散歩の様子を目にした。

「……………ちつ、くそ」

サスケは自覚する。

弱気になっていると。

無意識の内に里での日常を思い出し、ほとんど接触のなかったキバにさえ安らぎを求めようとしていたと。

「……オレもうちはだ！　父さんの息子で、兄さんの弟だ！」

サスケは自意識を強く保つことにより、その不安感を払拭しようとする。

「……………」

夜の闇を注視する。

常に危機感を持ち、集中して警戒をし続ける。

いつ何時、あの木の陰から敵が飛び出してくるか分からないのだ。

サスケは気を引き締める。

「……………」

耳元で煩く飛び回る藪蚊を払いのける。

その全身には、すでに至る所に虫刺されが出来ている。サスケは今すぐにでもこの羽虫たちを叩き潰してやりたい衝動に駆られたが、今は間違っても派手な動きをする訳にはいかない。我慢して、食われる前に静かに払って、被害を最小限に留めるしかなかった。

「……！ くそっ」

ぶん、と。一際大きい蚊の羽音に、サスケは我慢できずに耳元を強く払った。

そのまま右腕に目をやると、殆ど同じ箇所にも三つも赤い虫刺されがあった。忌々しく思いながら、そのまま視線を手首の方へやって、手の平で握っているクナイまで滑らせる。

仮面の男の一人からサスケが盗った物であり、唯一の武装である。その柄を強く握りしめることで、己が忍だという自覚を強く持つ。忍び耐え、この局面を切り抜ける決意を奮い立たせる。

「………」

空を見上げる。

夜はまだまだ深く、朝は遠い。

「………」

「………」

「………」

……瞼が異様に重い。

サスケの今日一日は、いつもの様に朝練から始まっていた。そうやって日中はたつぷ

りと汗をかいて、そして夕方からは男たちによつて囚われの身となり、脱走、逃走、潜伏。

……幼い体が休眠を求めるはずだった。

自身を狙う者から身の安全を守る必要のあるサスケに、強烈な睡魔が襲いかかる。それを太ももを強く摘むことで何とか誤魔化す。

そうして、痛みと共に思い出すのはあの金髪の少女のことだった。

第一印象は小汚いくノ一だった。

しかしそれは忍び組手で負けたことによりすぐに改められた。

サスケは覚えている。グラウンドで尻餅をつく自分を見下ろす、あの無機質な瞳を。

その時初めて、サスケは少女をナルコという一人の忍として認識したのだ。

次に見たナルコは弱々しかった。

自宅のドアの隙間から青白い顔を僅かに覗かせて震えていた。グラウンドで見た相手とはまるで別人で、サスケはつい心配になって、生まれて初めて誰かの看病をした――

「――はっ」

背後から強い気配がする。

サスケは夢の中から現実へと焦点を合わせると、反射的にその場から跳びのきー横合いから来た強い衝撃に息を詰まらせ、宙へと身を躍らせた。

「ぐっ……！」

地面を一度二度バウンドして、そのまま転がりながら木の幹へと叩きつけられる。

右腕が焼ける様に痛い。

凄まじい力で蹴られたのだ。

サスケが顔を上げると、闇の中に二つの白い仮面が浮かんでいるのが見えた。それぞれ丸印とバツ印が模様として描かれている。

——二人揃っているということは、どうやら毒は効かなかつたらしい。

「やっぱり餓鬼だな、呑気に寝てやがった」

「ちっ、ようやく見つけられたか……おいバツ、さっさと餓鬼を簀巻きにしろ。俺は幻術の準備をする」

「わかってるよ……今度は破られないようにな」

「お前も今度はスられないように両手はしっかりと縛っておけ」

「くそ、ムカつくぜ……」

バツ印の男が近づいてくる。

サスケは右腕の鋭い痛みを耐えながら、右ポケットに手を突っ込んでクナイを握る

…いや、握ろうとして、そこにクナイがないことに気がついた。

——しまった。居眠りする直前まで、手に持っていたのだった

自身が先ほどまで隠れていた林の方へと目をやると、そこには黒塗りのクナイが闇に紛れて落ちていた。

——ただ一つの武器を無為にしてしまった

失態である。

しかしサスケはその失態を悟られぬよう、ポケットに手を突っ込んだまま、あたかもそこにクナイがあるかの如く振る舞った。

「クナイ一本で何ができる」

丸印の男の静かな問いかけ。

二人はじりじりとサスケとの距離を詰めてくる。

「……ただのクナイじゃない。刃に毒を塗っておいた」

サスケの苦し紛れである。

「俺から奪った毒をか？」

「そうさ。解毒剤はまだ持ってるか」

「へっ。解毒剤じゃねえ。俺のは訓練で得た耐性なんだよ」

サスケが動揺の表情を浮かべる。

「……じゃ、じゃあ」

「バツ、もういいぞ。幻術の準備が出来た」

「はいよ」

バツ印の男がズカズカと近づいてくる。

「動くな！ それ以上近付いたら、奥にいる…幻術タイプの奴にこのクナイを投げる

！ そいつは毒の耐性ないだろ！」

サスケはそう言うと、クナイがあることにしている右ポケットを左半身で隠し、右手のみならず左手も添えて、まるでサムライが抜刀するかのような体勢をとった。

ちようど、自身の体によって男たちから両手が隠れる角度である。

「ふん、やってみる」

丸印の男が答える。

バツ印の男もサスケへと歩み寄ることを止めない。

実のところ、男たちはサスケの嘘を看破していた。林の中で黒光りするクナイをいち早く見つけ、サスケのポケットが空であることを確信していたのである。

だからこそ男たちは油断していた。

そしてサスケは、その油断を敏感に感じ取っていた。

サスケが自身の体の後ろに隠していた両手を、男たちの前へとあらわにする。

もちろんその手にはクナイはない。しかしその代わりに――

「――寅の印？　この餓鬼、火遁を使うつもりか!？」

「火遁……？　バツ、気をつけろ！　餓鬼でもうちは一族だぞ！」

「ちっ！　クナイを隠していると見せかけて、印を組んでやがったのか！」

丸印の男の警戒を受け、バツ印の男が素早い動きでサスケから距離を取る。

サスケは大きく息を吸い込み、肺を膨らませて――

「うちはサスケはここだあー!!」

大音量で叫んだ。

最後の悪あがきとして助けを呼んだのである。

そして全速力で逃げていった。

このとき、サスケはまだ火遁を使えなかった。

「てめえ！」

仮面の男たちがそれに追い縋る。

そのまましばらく逃げたが、子供と大人の歩幅である。距離は縮まる一方。

――もう、駄目か

すぐ後ろから感じる敵の気配に、サスケが諦めかけた……そのときであった。

「……!!」

一陣の金色の風が吹き抜けた。

その風は少女の姿をしていて、もつと言えばそれはサスケの良く知る後ろ姿だった。

「ナ、ナルコ……？」

サスケを背中で庇うようにして、うずまきナルコがそこにいた。

「ナルコ、お前……なんでここに……」

声も掠れがすれにされたサスケの問いかけ。

ナルコはそれをいつも通りに黙殺すると、相對する二人の男たちをその暗い青色の瞳で静かに見据えた。

すでに赤いチャクラの尻尾を生やし、戦闘の体制に入っている。

「妙な餓鬼が来やがった」

「ちっ、なかなか良い瞬身を使ったぞ。そしてあの尻尾……バツ、油断すー」  
ドゴン。

ナルコが尻尾で足元の地面を殴りつけた音である。

周囲にはもくもくと土煙が立ち込め、ナルコとサスケの姿を男たちから隠した。

「逃すなバツ！ 風遁！」

「もうやつてるよー」

そしてそれと同時に、バツ印の男も風遁の印を結んでいた。

ー風遁・大突破

放たれた広範囲の突風により、ナルコたちを包む砂埃が一瞬にして晴れる。

するとそこには、尻尾を地面に突き刺して体を固定し、風遁に吹き飛ばされぬよう踏ん張るナルコと、その腕に抱かれるサスケの姿があつた。

「はっー」

続けて、丸印の男が一枚の手裏剣を投げる。狙いはナルコの胸辺り。

手裏剣は突風に乗って加速し、一瞬でナルコの眼前まで迫る。

「ー」

ナルコはサスケを抱えたまま、それをしゃがんで避けようとしてー

「ナルコー！ 横に飛べー」

サスケの指示に従った。

そうやって手裏剣をやり過ぎしてみると、ナルコたちのすぐ脇を通り過ぎた手裏剣の黒々とした影。それは影に擬態した二枚目の手裏剣だったのである。

「今は夜だ。手裏剣の影はあんなにハッキリと見えない」

ナルコと離れたサスケが言う。

——影手裏劍の術

ナルトがあのまま体勢を低くして避けていたら、間違いなく影の方の手裏劍が突き刺さっていただろう。

「……この視界の悪い闇の中、風遁で加速させた影手裏劍を見切るとは……」

「おい、マル。さつき一瞬だけ、うちの餓鬼の瞳の色が変わったぜ。あれが写輪眼か？」

「さあな……しかしその予兆かもしれない。念のため、目は見るな」

仮面の男たちは瞬時に情報を共有すると、ナルコとサスケへと向き直る。

「ナルコ……」

男たちに注意を向けたまま、サスケが口を開いた。

「お前、オレを助けに来たのか……？」

「……………」

ナルコは答えない。

ただチャクラの尻尾をゆらりと動かし、迎撃態勢をとるのみだった。

「……逃げろ。奴らの狙いはうちは一族のオレだ。だから……オレはともかく、お前は殺されるかもしれない」

「……………」

ナルコは答えない。そして、サスケの言葉の通り狙われたのはナルコだった。まず男たちは手裏剣をナルコとサスケの間に投げ放ち、二人の間に距離を作った。そしてその回避行動の隙を突いて接近し、丸印はサスケを、バツ印はナルコをそれぞれ相手取る。

「……………くっ！」

「大人しくしているろ」

サスケは一瞬で丸印の男に組み伏せられた。

利き腕の負傷と疲労が原因である。うつ伏せにされて、手を後ろに回され、関節を極められている。

自力では、到底脱出不可能な状況である。

「……………ナ、ナルコ！ 逃げろ！」

そのままの状態で、サスケがナルコを見やる。

ナルコはまだバツ印の男と戦っていた。

バツ印が中段蹴りを繰り出す。

身長差の関係で頭部へと向かってくるそれを、ナルコは尻尾で受ける。そしてそのまま弾き飛ばし、バツ印の体勢を崩す。

「……………死ねっ」

その隙をナルコは逃さない。

先を鋭く尖らせた尻尾を真つ直ぐにバツ印の無防備な懐へと伸ばし、貫かんとする。しかしそれは作られた隙。つまるところ誘いだった。

バツ印の男は尻尾の槍を難なく躲すと、伸びきった尻尾を置き去りにして、一直線にナルコへと駆けていく。

「……っ！」

振りかぶられる男の右腕。

咄嗟に両腕でガードするナルコ。

そして衝撃。

ガードの上から受けたにも関わらず、男の拳はナルコの軽い体を五メートル近くも吹き飛ばした。

「ナルコオ!!」

組み伏せられたまま、サスケが叫ぶ。

「逃げる!　普段はお前が言ってるだろ!　関わるなつて!　それなのに何で

オレを助ける…!　関わってこようとするんだ!」

ナルコがふらつく足で立ち上がろうとしている。口の中を切ったのか、唇の端からは血が垂れている。

そして男の拳を直接受けることとなった右腕。ぷらんぷらんと頼りなく揺れており、一目で折れていることが分かる。

「逃げろナルコ!!」

「にげない」

ナルコが、はつきりとそう答えた。

「助けてやる…」

眩きながら、ナルコが立ち上がる。

その顔はいつもの無表情ではない。

そのとき。サスケは初めて、少女の本来の姿を見たのだった。

「何でかわかんないけど、お前の苦しむところは見たくないってば」

「!!」

「まってろ。こいつらぶつ殺して、お前のこと絶対に助けるから…!」

瞬間、ナルコの威圧感が増す。

その全身に赤いチャクラが巻きつき、唇の出血が一瞬で止まる。瞳孔が縦に割れ、髪の毛が逆立ち、爪が鋭く伸びる。

空気が震えるほど膨大な量のチャクラ。

仮面の男たちとサスケが驚きに言葉を無くす中、ナルコは己の内に宿った九尾の力

を、初めて誰かを守る為——そして、憎き相手を八つ裂きにする為に行使するのだった。